

汽車の中はどことも満員でしたが、高知駅で友人と別れ一人須崎駅に下車、駅から約十五キロの道を歩いて帰ったと記憶していますが、帰ってみれば比島で長兄は戦死、次兄も白衣姿で帰り須崎市の高陵病院に入院し、ほどなく他界しました。父母の心痛如何ばかりかと存じました。

「ローマは一日にしてならず」、現在の平和なそして豊かな日本での生活も、数知れぬ多くの兵隊や国民の生命と財産を失い、そして多くの苦難と努力の積み重ねの歴史の結果です。今ははや、昔のこととなりましたが、悲惨な過去を忘れることのないようお願い申し上げます。

## 特別攻撃隊体験

岐阜県 小崎 良 三

昭和二（一九二七）年八月、私は岐阜県高山市に生まれました。岐阜県立斐太中学校四年在学中の昭和十

八年十月、海軍甲種飛行予科練生として松山海軍航空隊へ入隊しました。

当時、昭和十六年十二月八日には太平洋戦争が勃発し、日本の連合艦隊はハワイを攻撃し大戦果を挙げたのですが、すぐ翌年の昭和十七年五月三十日からのミッドウェー海戦の苛酷な海戦では、日本の連合艦隊の主力を失い、最新鋭空母の「赤城」「加賀」などが撃沈されてしまいました。このハワイ奇襲で火蓋が切られた大戦も、とくにミッドウェー海戦後の多くの南太平洋の海戦では、米軍の質量の圧倒的力によって風雲急を告げていた時代でした。

この昭和十八年頃から、ミッドウェー海戦によって戦闘機、艦爆、艦攻などの優秀なパイロットは多く亡くなってしまい、海軍では飛行兵を急募し始めました。私もちょうど斐太中学の四年生頃でしたが、自身も軍需工場へ行ったか、あるいは開墾のお手伝いをしたり、何かお役に立つことは、と考えておりました。学業も半分くらいしか出来ない時でした。そんな中で、私は海軍の飛行兵になって頑張りたいという

気持ちを抱いていた時でした。

その昭和十八年の六月頃は、私は三人兄弟の一番下で、上の兄が既に中国の南京辺りにおりましたし、中の兄も南支・広東におりましたので、自分のことを両親にどのように話してよいものか心配しておりました。そして「実は私も海軍の飛行兵に志願したい」と相談したところ、親父は「また跡継ぎがなくなってしまうようで弱ったなあ」というようなことを言いましたけれども、母親は「こんな時だから、国のためだから」と言うことで両親の許しを得ました。

昭和十八年六月に岐阜商業学校で海軍甲種予科練習生の試験を受けました。飛行兵と言いますと、目、耳などの感覚などの厳しい適性検査がありますが、一次検査では半分くらいが落ちたようでしたが、幸い私は一次試験も受かり、二次試験は、八月頃に大竹海兵団に行き受けました。その時は、今は亡き高山市の善光寺の泉信潤君も一緒に行きました。

泉信潤君は、最後は朝鮮の元山におり、終戦の八月

十五日にテニアンの米海軍艦艇に特攻攻撃を掛ける予定でしたが、終戦で復員してきた戦友です。そして泉君は「俺はテニアンで死んだ身だ、幾多残されているテニアンのご遺骨を収集して供養するのだ」と十四回にわたり自費で遺骨収集をされて、最期にはテニアン島で遺骨収集中に洞窟から海に流され、亡くなられた、私の戦友です。

二次試験の海兵団では吊り床に寝かされて、本当に苦労したことが思い出されますが、泉君も私も合格して、昭和十八年十月一日付で松山海軍航空隊へ入隊となりました。

当時、搭乗員の募集に対する応募は全国各地から若者が集まり、松山航空隊へは三〇〇〇人ほど入りました。入隊は昭和十八年十月一日、私はその後台湾の台中、台南の航空隊へ行った訳ですが、松空で二カ月ほど経ってから再び適性検査があり、私は操縦員となり、泉君は偵察員になりました。泉君は「小峠君、操縦員になれてよかったな、俺は偵察員だ」と当時残念

がっておりました。

このようにして松山航空隊に入り、最初からバットをどれだけいたらいたらうか、数え切れないほどでした。陸軍は殴ることですが、海軍は外国との交流もあるということ、外から見えるところはあまりたかかない、見えないところをたたく。海軍ではバットより少し大きい棒で尻をたたくのです。まだ松山航空隊では本当の基本訓練でしたが、それでもだいぶやられました。

そのような基本訓練を終わり、入隊した三〇〇〇人のうち一二〇〇人が搭乗員で、あとの一八〇〇人が偵察員、その搭乗員一二〇〇人のうち一八〇人が台中航空隊へ転動を命ぜられたのが昭和十九年五月十八日でした。神戸から「帝香丸」という商船に乗せられて静かな瀬戸内海、波の高い玄界灘を通過して、そのころはまだ平穏な沖繩をすぐそばに見ながら、しかし敵潜水艦を警戒しながら約一週間かかって基隆に着きました。

基隆に着いてから台中に着いたのが五月二十五日、

五月二十七日の海軍記念日を挟んで、六月からは飛行訓練に入りました。

訓練は、初めは離着陸訓練をしながら、さらには編隊飛行、特殊飛行、夜間飛行、計器飛行などでした。戦局がだんだんきびしくなると、台湾も第一線基地になろうとしていた時期で、私は台南の航空隊に転動を命じられました。その飛行隊では、さらに苛酷な訓練をしたのですが、それこそ毎日バットをいただきました。

一機に対して六人が専属でその飛行機を使うのですが、一人でもへまをすると六人が連帯でたたかれ、本当に苦労しました。

「失敗は成功の基」という言葉がありますが、我々の飛行訓練をやっている飛行機乗りには、この言葉はありません。ということは絶対に通用しないからです。そのつもりでかかれということで、失敗したらそれで終わりだということです。そして敵のグラマンの攻撃をどれだけ受けたかわかりません。

台南へ移る時は、私の後ろに分隊長を乗せて、しか

も編隊飛行の真ん中で行きましたが、私は緊張しなからの飛行でした。その台南でもグラマンの攻撃を受けました。

台南へは昭和十九年九月に行き、すぐ訓練をやつて、正月も二日から訓練に入りました。

昭和二十年二月十日、空襲警報もなかったのですが、私はちょうどその日は編隊飛行訓練で、私は一番機で自動車のアクセルに相当するレバーをグーッと出して、三機編隊での離陸寸前に、敵戦闘機が五〇メートルの低空で六機来ました。見ますと米国のP51です。私の機はスタートのレバーを入れていますから、飛行機は出ます。急にブレーキを踏めばひっくり返りますから、止まるのを待って、すぐ飛び下りて逃げた訳です。

尻に落下傘を着けたまま飛び降り、そして五〇メートルほど逃げました。したらP51がまた来まして、我々の三機を撃つてきて、私の飛行機はガソリンに引火して燃えてしまいました。その時に上空には二〇機余りの飛行機が編隊飛行や特殊訓練をやっております

た。この空襲で十数人が亡くなりましたが、私が本当に仲良くしていた金田君は、着陸しようとする時にP51に狙われました。P51が去ってから駆け寄りますと、肺半分が飛び散ってなかったのです。その時の飛行場には、鉄甲弾という十三ミリの弾や葉莢がいっぱい落ちていました。そして金田君は操縦桿を握ったまま亡くなっていました。

それから飛行機訓練を続けておりましたところ、ちょうど昭和二十年二月二十日頃、内地が危なくなつたので貴様らは全て特攻隊要員として内地へ帰れという命令が出たのです。私らは台南からフィリピン方面へ転動すると思っていたのですが、ここで内地へ帰れという命令でした。当時米軍の沖繩進攻寸前で、米機動部隊が沖繩をぐるりと囲んで上陸寸前の状態の中で、一八〇人は内地へ帰れという命令です。準備を整えて、台南から基隆までトラックで送られ、基隆からは「日昌丸」、一部の者は海防艦に、大学出の海軍予備学生たちは「南京丸」に乗り、一月二十一日の夜、基隆の港を出ました。

台湾海峡を渡って上海へ、中国の沿岸を通って門司に入りましたが、朝になってみると一隻おりません。

聞きますと、その予備学生たちの乗った「南京丸」が撃沈されたということで、その姿はなかったのです。

苦勞をして、私たち二隻の船は一週間かかって門司に入りました。そうしたところが内地も空襲で相当やられており、九州長崎の近くの諫早の小さな飛行場がある飛行隊に入隊を命じられました。ところが船の中で食べ物が悪かったのか発疹チフスが出まして一カ月くらい隔離されました。そして飛行訓練が始まったのですが、私にはどうして出ないのかなと思っておりましたところ、諫早に入りましたから五月頃、私にマリアが発病しました。四十・三度、当時私はまだ十八歳にもなっておりませんから、こういう高熱というものは辛く、約一カ月海軍病院におりました。

少し熱があっても早く病院を出してほしいと軍医に懇願しました。そしてキニーネをのみましたら回復し、原隊に復帰しました。ところが一八〇人おりました同僚のほとんどは震ヶ浦あるいは千歳、美幌などへ

転動して原隊はからっぽでした。残った者で再編成し、再び飛行訓練を始めたわけです。

昭和二十年八月九日、長崎に原爆が投下されました。ちょうどその頃は我々は、昼はグラマンが来るのも出来ませんので訓練は出来ず、その間、夜間訓練ばかりやっていました。夜間高度三〇〇〇メートルぐらいから急降下爆撃姿勢で突入する訓練をやったのです。

八月九日十一時前でした。飛行服を来て三人ぐらいでブラブラしていた時、B 29が一機、高度一万メートルで北の方から飛んで来ました。空襲警報が出ていましたから、何機編隊で来たのかなと思っておりませんでした、たったの一機で来たのです。今日はおかしいな、偵察かなと思っておりますと、諫早と長崎は直線で三十三キロ、そして長崎の上空に来たのが良く分かります。そこで落ちる所はもちろん分かりませんが、ピカッという、あの熔接時の火花のような閃光が一面

に、当時まだ原子爆弾という言葉はなく、広島に落ちていますから「ピカドン」です。

そして音はしばらく経ってから「ドドン」と、震動もしばらく経ってから来て、諫早の兵舎のガラスが割れる寸前ぐらいに震動しました。それから「キノコ雲」が上がりました。そして一晩中、長崎の町は燃えておりました。

長崎で一発で約十万人、広島が十五万人、私はこの目で本当に原子爆弾の落ちる瞬間を見ました。本当に悲惨な状態でした。そして翌朝八月十日、特攻出撃待機命令というのが出ました。覚悟はしていましたが、これで今生の別れだろうと考えました。私は八月十六日で満十八歳になるところですから、十七歳と十二カ月で、今生の別れということになります。私もやはり母親の顔が朝から晩まで忘れることが出来ませんでした。小さい頃遊んだ小川の思い出やら、そんなことが思い出されましたけれども、やはり二百五十キロの爆弾を腹に付けて離陸すればそれで終わりです。

後には何も汚いものは残さないということで、出発までに衣類は全部洗濯し、いつでも出撃できる状態の中で終戦を迎えた訳です。多くの戦友たちが先に先行(逝)ってしまつて、私たちは残つてしまつたというような気持ちもありました。

復員命令は八月二十二日に出ました。そして二十二日に戦友と海軍のキャンバスでできた衣のう袋に、着ていましたマフラー、飛行服など一切を入れて、飛行靴を履いて汽車で帰りました。高山まで二昼夜、途中二十二日の夜、汽車が止まった所が広島駅ということには分かりませんでした。汽車が一時間停車するということを駅員が知らせて来たのです。真っ暗で何も分かりません。それで汽車の戸を開けましたところ、プーンと人を焼く臭いが、そして駅の周辺でポポーツと火を焚いています。駅員に聞きますと「広島だ」と言う。何もありません、ただプラットフォームがあるだけでした。二〇〇三〇メートルおきに竹の棒を立てて、それに電線を繋いで裸電球を点けたのがプラットフォームでした。私は駅前まで出て見ました。一発で十五万

人死んだのですから、八月六日に落ちた原爆、それから二週間、まだ死者を弔っておりました。これが駅前から、ちょっとした広場の中でも死者を弔っておりました。

という事で私は長崎で原爆の落ちるのを、さらに広島で亡くなられた皆様を弔っておる姿を見てまいりました。本当に心の痛む思いをしながら家へ帰りました。

二十三日夜八時頃、高山の駅へ帰りまして、てくてく家のそばまで来ましたところ、家の親父がちょうど月夜の晩で寝巻を着たまま、月に手を合わせて立っておりました。「おとつあん、帰ってきたで」と、親父は吃驚しました。まだ兄たちが中国にいるものですからなお吃驚して、朝まで苦労話をさせていただきました。

私は、あの大战は侵略的意図をもち、間違った戦争であったにしても、少なくとも我々の当時の心境は熱血溢れる愛国精神に満ち、何人にも負けない犠牲的精

神を持っていました。その純粹さは誠に尊いものであったと、私自身、そして同年兵も自負をいたしております。

七十三年の人生の中で十六歳、十七歳の海軍飛行兵の体験というものは、とても言葉で言い表せない貴重な体験でしたし、私の一生の思い出になっております。復員してから岐阜県の職員として三十八年間勤めさせていただきましたけれども、やはり海軍の二年間の苦労が、私が勤め続けた礎であったと思っております。